

コロナワクチン不安解消…米モデルナ、日本での接種向上へ対話強化

11/14 ニュースイッチ



チーフ・メディカル・アフェアーズ・オフィサーのフランチェスカ・セディア氏

米モデルナは日本でのワクチン接種率向上を目指し、医師など専門家との対話を強化する。新型コロナウイルス感染症の重症化リスクが高いとされる高齢者などを対象に、日本でも10月から65歳以上の人らを対象とした定期接種が始まった。モデルナは医師をはじめとした専門家を通じてワクチンへの不安解消に取り組み、日本での感染拡大の予防、さらには事業成長につなげる狙いだ。

モデルナが7日に発表した2024年第3四半期決算によると、改良型の新型コロナワクチンの売り上げが想定を上回り、純損益が1300万ドル（約20億円、前年同期は36億3000万ドルの赤字）に黒字転換した。特にグローバルの売上高18億ドルのうち12億ドルを占める米国では、医療体制の整備や65歳以上が無償接種の対象といった国策も後押しし、米国での市場シェアを40%に伸ばした。

一方、日本の接種率は伸び悩む。モデルナ・ジャパンが1242人を対象に実施した調査では、70%が新型コロナ感染症を脅威に感じているものの、ワクチン接種意向は21%に留まるといふ。

モデルナは新型コロナ流行株への対応やインフルエンザとの混合ワクチンの開発など継続的な開発投資を実施する。患者との関わりが深い医師に向けた情報発信の強化でワクチンに対する不安解消に取り組むことが、日本でワクチン事業の長期的な成長のカギとなる。

コロナ重症度の目印、順天堂大などが明らかにした遺伝的特徴

2024年09月14日テクノロジー

順天堂大学の服部浩一特任先任准教授らは、新型コロナウイルス感染症の重症度の目印と

なる遺伝的特徴を明らかにした。コロナ患者の検体組織を解析。血液や血管に関わる遺伝子の個体差を比べたところ、日本人に最も多い遺伝子の個性を持つ患者は他の遺伝子の個体差に比べ重症度が低くなることが分かった。新型コロナの重症化の予想や早期診断などに役立つ可能性がある」と期待される。

東京大学との共同研究。成果は国際科学誌電子版に掲載された。

2020年3月—21年2月の期間に、順天堂大医学部附属順天堂医院へ入院か通院していた18歳以上の新型コロナ患者を対象に調査。研究への同意が得られた患者46人の血液を解析した。血液の凝固などを制御するたんぱく質「PAI-1」に着目し、遺伝子の個体差を示す「遺伝子多型」を調べた。一般的に遺伝学的に日本人に多い「4G/4G」よりも、欧米人に多い「5G/5G」の方が重症患者の割合が高いことを示した。

新型コロナ感染症は7月から第11波に突入したと考えられている。ウイルスの弱体化が進んだが、日本では高齢化が進んでいるため、重症化機構の解明が喫緊の課題となっている。